

令和 4 年 5 月 26 日現在

機関番号：33936

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2019～2021

課題番号：19K10916

研究課題名(和文) 終末期の話し合いの関連要因と終末期がん患者のQOLや遺族の精神健康に及ぼす影響

研究課題名(英文) Association between end-of-life discussions, quality of life of cancer patients at end-of-life, and mental health of the bereaved family members of cancer patients

研究代表者

林 容子 (Hayashi, Yoko)

人間環境大学・看護学部・講師

研究者番号：20808703

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、がん診療連携拠点病院の一般病棟で死亡した終末期がん患者の遺族を対象とした質問紙調査と診療録調査により、一般病棟でのEnd-of-life discussionの実態と関連要因、および終末期がん患者のQOLや遺族の精神健康に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした。主な結果は、1) 6割以上の患者が医師とEnd-of-life discussionをしており、End-of-life discussionに関連する要因は、「患者の予後認識」と「がんになる前に家族と終末期の話し合いをした経験」、2) End-of-life discussionは緩和ケアの質(CES)の向上と関連していた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

約7割のがん患者の死亡場所となっている一般病棟でのEnd-of-life discussionの実態や終末期がん患者と遺族のアウトカムへの影響を検討した結果、進行がん患者が非専門病棟で死亡した場合でもEnd-of-life discussionは患者のQOLを向上させ、遺族の心理的リスクを軽減することが示唆され、これからのがん終末期ケアや遺族の悲嘆ケアの改善に貢献するためのEnd-of-life discussionの在り方を再認識することができた。

研究成果の概要(英文)：This study investigated the effect of end-of-life discussions between physicians and patients on general ward cancer patients' quality of death and quality of palliative care. The findings were the following: (1) over 60% of the patients had end-of-life discussions with their physicians, and the factors associated with the discussions were patients' prognostic perceptions and end-of-life discussions with their families before being diagnosed with cancer; and (2) end-of-life discussions were associated with better quality of palliative care (CES).

研究分野：がん看護学

キーワード：緩和ケア 死別 うつ 終末期 quality of life

## 様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

終末期の話し合い (End-of-life discussion) は終末期がん患者が希望するケアを受けるために重要である。

国内での End-of-life discussion の緩和ケア病棟の遺族を対象としたアンケート調査から、約 8 割の終末期がん患者が医師と End-of-life discussion を行ったと報告している。また、End-of-life discussion に参加した遺族は、抑うつや複雑性悲嘆を発症する可能性が低く、早期からの End-of-life discussion は、望ましい死を迎える可能性が高く、質の高い終末期ケアを提供することと関連していた。しかし、国内の緩和ケア病棟のがん死亡患者は 13%に過ぎず、この研究は一部の良い終末期ケアを受けた患者・家族の調査である。約 7 割のがん患者の死亡場所である一般病棟での End-of-life discussion の実態や患者・遺族アウトカムへの影響は何も明らかにされていない。

### 2. 研究の目的

一般病棟で療養した終末期がん患者の遺族を対象としたアンケート調査と診療録調査により、1) 一般病棟での End-of-life discussion の実態を明らかにする、2) 一般病棟での End-of-life discussion の関連要因を明らかにする、3) 終末期がん患者の QOL や遺族の精神健康に及ぼす End-of-life discussion の関連を明らかにすることを目的とした。

### 3. 研究の方法

自記式質問紙による横断的観察研究とし、倫理的な理由から患者の評価を患者本人ではなく遺族が行った。がん診療連携拠点病院 2 施設の一般病棟で調査票の郵送予定日から遡り 90 日前までに死亡した「消化器がん」、「肺がん」患者の遺族 226 名を対象とし、2019 年 11 月～2020 年 3 月に調査票を郵送した。なお、インフォームド・コンセントは、郵送された調査票表紙のチェック欄により適切な同意を取得した。

遺族を対象としたアンケート調査から、主要評価項目の End-of-life discussion の実態と終末期がん患者の QOL 評価尺度 (GDI)、緩和ケアの質評価尺度 (CES)、遺族の抑うつ評価尺度 (PHQ-9)、遺族の簡易版複雑性悲嘆質問票 (BGQ) を調査した。また、患者の年齢、性別、がん種、死後経過日数、在院日数、緩和ケアチームの介入状況は、対象施設の研究協力者が診療録から過去に遡って調査した。

統計解析は、SPSS ver. 25 (Armonk, NY: IBM Corp) を使用し、統計的有意性を  $p < 0.05$  とした。研究目的 1) 主要評価項目である End-of-life discussion の実態は記述統計で算出した。研究目的 2) 一般病棟での End-of-life discussion の関連要因は、End-of-life discussion の有無と患者・遺族背景との関連を 2 検定、Fisher の正確確率検定、Wilcoxon の順位和検定により単変量解析を行った。次に、End-of-life discussion が起こる確率を説明するため、単変量解析で有意差のあった 2 変数を強制投入し、ロジスティック回帰分析を行った。研究目的 3) 終末期がん患者の QOL や遺族の精神健康に及ぼす End-of-life discussion の関連は、End-of-life discussion の有無と患者・遺族アウトカム (GDI、CES、PHQ-9、BGQ) との関連性を t 検定で求め、2 群間の差の大きさを Cohen's  $d$  で算出した。さらに、End-of-life discussion の有無と関連があった緩和ケアの質 (CES) への影響を予測するため、単変量解析で有意差があった End-of-life discussion の質の項目を説明変数とし、重回帰分析を行った。

### 4. 研究成果

遺族 137 名 (60.6%) から返信があり、有効回答 119 名 (52.7%) であった。

#### 1) End-of-life discussion の実態

遺族に「あなたは患者と医師との終末期の話し合いに参加したか」と尋ね、63.9%の遺族が End-of-life discussion に参加したと回答した。End-of-life discussion を初めておこなった時期では、死亡 1 カ月前が 55.2%であった。主な介護者である遺族以外で End-of-life discussion に参加していたのは、他の親族 (55.3%)、看護師 (25.0%) だった。End-of-life discussion の内容では、「希望する治療やケア」(47.3%)、「化学療法などの治療の限界」(38.2%) について話し合っていた。End-of-life discussion における医師の患者への対応として「体調への配慮」(50.0%)、「わかりやすい説明」(47.4%)、「最適な選択肢の検討」(44.7%)などを挙げている。

#### 2) End-of-life discussion の関連要因

ロジスティック回帰の結果、死亡 1 カ月前の患者の予後認識の「重い病状と考えていない・重い病状であることは知らない」と比較して、「重い病状だが治る」(OR=4.5 [95%CI, 1.2-16.7]) という患者の予後認識と「がんと診断される前に家族と終末期の話をした経験がない・経験したかわからない」と比較して、「がんと診断される前に家族と終末期の話をした経験がある」(OR=2.8 [95% CI, 1.1-6.9]) で、独立して有意に End-of-life discussion が行われていた。

#### 3) End-of-life discussion の有無と患者・遺族アウトカムとの関連

t 検定の結果、End-of-life discussion を行った方が有意に緩和ケアの質評価は高く、有意ではなかったが終末期がん患者の QOL は高く、遺族の抑うつと複雑性悲嘆は低かった。さらに、重回帰分析では、End-of-life discussion 時の医師の患者への対応として、「体調面への配慮」(  $\beta=0.40$ ;  $P<0.001$  )、「意見や希望の重視」(  $\beta=0.29$ ;  $P=0.009$  )と、遺族の「End-of-life discussion の適切な理解」(  $\beta=0.42$ ;  $P<0.001$  ) に有意な関連がみられた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 Hayashi Yoko, Sato Kazuki, Ogawa Masahiro, Taguchi Yoshiro, Wakayama Hisashi, Nishioka Aya, Nakamura Chikako, Murota Kaoru, Sugimura Ayumi, Ando Shoko	4. 巻 0
2. 論文標題 Association Among End-Of-Life Discussions, Cancer Patients' Quality of Life at End of Life, and Bereaved Families' Mental Health	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 American Journal of Hospice and Palliative Medicine	6. 最初と最後の頁 1-11
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1177/10499091211061713	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 林容子
2. 発表標題 一般病棟での終末期の話し合い（End-of-life discussion）の実態と終末期がん患者のQOLや遺族の精神健康に及ぼす影響に関する研究
3. 学会等名 第26回日本緩和医療学会学術大会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	安藤 詳子  (Ando Shoko)  (60212669)	名古屋大学・医学系研究科（保健）・教授   (13901)	
研究分担者	佐藤 一樹  (Sato Kazuki)  (60583789)	名古屋大学・医学系研究科（保健）・准教授   (13901)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------